

夢の通過点

一九四七年（昭和二十二年）啓介・十二歳、章三・十歳。二人はすでに児童劇団の子役として映画や舞台で芝居をしていた。

撮影の後、二人で一緒にミュージカル映画『踊る結婚式』のフレッド・アステアのタップダンスを観たとき、あまりの素晴らしさと格好良さに興奮で全身が震えた。高揚した気持ちを抑えきれない二人は「絶対にタップダンスをやるんだ！」と意気投合し、ステップをしながら家路に向かった。

念じる力とは凄いもので、その年に偶然タップダンスの先生と出会い、二か月後にはなんと二人は舞台で初タップを踏んでいたのだ。

フレッド・アステアによってタップダンスの魔法にかけられた二人は、タップス（靴底の金具）がすり減るほど昼夜を問わず猛烈に稽古をした。あこがれのフレッド・アステアのような華麗なタップダンスを踊るといふ【夢】が二人を駆り立てた。

持ち前の器用さと幼少の頃から磨かれた舞台人としての勘の良さ、そして連日連夜の猛稽古の甲斐あって、二人は瞬く間に日本のショービジネス界に「中野ブラザーズ」という名を轟かせた。

日劇での『江利チエミショウ』の出演を皮切りに、一躍スターダムに登り詰めた二人は、あの時誓った「絶対にタップダンスをやるんだ！」という【夢】を叶えて、思う存分タップダンスを踊った。

やがて、あこがれのフレッド・アステアに逢いたいという【夢】が実現。映画『踊る結婚式』を観たときの衝撃と同じくらい全身に震えが走った。

一九五九年（昭和三十四年）、ショービズの都ラスベガスで【夢】のような一年間のロングラン公演。ステイプ・パーカー、シャーリー・マクレーンをはじめ、アメリカの超一流舞台人と間近で接した二人は、ショーの素晴らしさと厳しさを再認識して帰国した。

帰国後はさらに劇場出演のオフアーに拍車がかかり多忙を極めた。

一九六九年（昭和四十四年）、二人の【夢】であった待望の「中野ブラザーズスタジオ」がオープン。生徒も増えて教える喜びも味わい、充実した日々を過ごした。しかし、スタジオ経営を任せていた旧知のマネージャーの経営手腕が至らず、多額の借金を背負ってスタジオは二年で閉鎖に追い込まれた。

【夢】破れたこの出来事に、肩を落としている暇はない。幸い日本全国からの出演オフアーが続いていたため、これまで以上に奮起し、タップダンスを踊って踊って踊りまくり、二人で窮地を乗り越えた。きつと一人だったら押しつぶされていたに違いない。

良いことも悪いことも、楽しいことも苦しいことも、【夢】を見るのも【夢】破れるのも、兄弟二人三脚だからこそ歩みを止めずに前進することができたのだろう。

その後、自分たちの舞台出演に加えて、様々な演劇や歌謡ショーなどの振付もこなし、忙しくもまた充実した日々が続いた。

やがて、多くの方々からの支援があり、再びスタジオを持つことができた。中野ブラザーズの華麗なタップステップを学びたいという生徒たちも応援してくれた。

縁あって、兄・啓介は東京で、弟・章三は福岡で、それぞれレッスンをすることになった。人生の苦楽を常に一緒に乗り越えた二人には、離れた距離は問題ではない。

中野ブラザーズが創り上げたタップダンススタイルの種を蒔き、育み、将来その生徒たちがたくさん美しい花を咲かせてくれたらそれでいい。後進の育成が二人の大きな【夢】になっていった。

「章ちゃん」

日劇時代の観客からの黄色い声援ではない。

それは、病に伏した兄・啓介が病院のベッドで発した最期の言葉である。

二〇一〇年八月一〇日、兄・啓介は肺炎で死去。

二人で【夢】を追い続け、昭和・平成と一直線に駆け抜けてきたタップダンス人生。弟・章三の哀しみは計り知れない。

七〇周年記念公演の告知チラシのラフが仕上がった。

背景に浮かぶ【夢】の文字を見て章三は言った。

「僕たちは、夢を生きてきたんだね」

「では、このデザインでよろしいでしょうか」

「うーん」章三はなかなか首を縦に振らない。

「中野ブラザーズは、やっぱり二人で中野ブラザーズだよ」

ハッとした。

当初は章三ひとりだけの写真を使う予定でいたのだ。確かにそうだ。この記念公演は、中野ブラザーズという兄弟が二人で歩んできた【夢】の道なのだから。

啓介と章三が、舞台上でスポットライトを浴びて楽しそうに肩を組んでいる写真を挿し入れると、チラシ全体がぐっと引き締まった。

「先生、いままでたくさんさんの舞台に出演されていますが、ご自身が出演した舞台で、最高に素晴らしいと思う舞台はなんですか？」

「それはね、次の舞台。この七〇周年記念公演だよ」

迷うことなく即答した章三の瞳は、少年のようにキラキラ輝いていた。

二人で歩んだ夢のみち 八十歳 中野章三 ここは夢の通過点

二〇一七年四月吉日